

9月21日に行われた鶴岡首席交渉官による記者会見の冒頭発言

首席交渉官中間会合は本日で終了した。明日、日本に帰り、その後バリに向かうこととなる。今回の会合は、バリでの TPP 首脳会合に向けた準備の一環として開催された。あくまで中間会合であり、ラウンドでない。閣僚や首脳への報告、閣僚や首脳の議論が進展するような準備を行うのが今回の首席交渉官会合の目的である。会合の進め方としては、中間会合を含めた各作業部会がブルネイ以降も議論を続けているので、個別分野の議論の状況について報告を受け、評価をした上で、詰められるものは首席交渉官の間でも詰めておき、閣僚へどのような報告をし、どのような作業をしてもらうのが適当か、各分野に渡って議論した。多くの課題についてこれまでも議論されてきたので新しい展開はないが、論点を整理した上で、閣僚が、政治的展開を含め、整理をできるように課題を明確にするという作業が行われた。全体の印象としては、閣僚が首脳会合に向けた議論をするための準備としては、一定のところまで整ったと思う。当然、バリに入って、首席交渉官による最終段階の摺合せが予想される。バリ直前まで続く中間会合もあるため、そういったものを首席交渉官会合で刈り取り、閣僚会合及び首脳会合への報告の材料としてバリで整理するという段取りである。

今回の首席交渉官会合の内容について言えば、分野によってはテキストに基づいた協議もした。議論が煮詰まってきたので、基本的には一般論の応酬ではなく、具体的な案文や各国の立場についてのやり取りで進んだ。集大成として、課題の明確化や、閣僚にどのような形で交渉進展を可能とする方向性についての指示を出してもらうかを可能にするような作業が行われた。全体の評価としては、閣僚が議論できるような準備を整えることに一応こぎつけたと言える。他方、まだ中間会合が残っている作業部会もあり、また、さらなる作業の必要性が指摘された課題もあったので、短い期間であるが、それぞれが国内に戻って作業をした上で、閣僚にも報告しつつ、バリで最終段階の整理をする。

個別のことは言えないが、各首席交渉官は、明確な認識を2つ共有した。1つ目は、どのような作業が首席交渉官の課題として残されているかということ。2つ目は、閣僚に対してどのような報告をすべきかの整理がなされたので、各国の首席交渉官は、帰国後に閣僚のバリ会合への準備に取り掛かるということ。今回の会合は、事務的整理であるが、認識を共有できたので、今後の交渉を政治レベルで進めるための基盤整備に成功したと評価する。

(以上)